

本間要一郎絵画展観覧

[神奈川県労働者学習協会月刊機関紙「学習運動ニュース」原稿]

下山房雄

半世紀の歴史を経たわが神奈川県労働者学習協会の会長職には今まで6人が就いている。初代（ ～ ）故・渡辺俊次郎、二代（ ～ ）本間要一郎、三代（1970～87）下山房雄、四代（1987～ ）故・鷺見友好、五代（ ～ ）萩原伸次郎である。うち初代の渡辺さんが日本共産党神奈川の幹部であったことを除けば、全て会長のとき、大学教員で経済学者であった。本間—横国大、資本論（特に3巻）研究、下山—横国大、賃金理論・労働運動研究、鷺見—財政学、萩原—世界経済（特にアメリカ経済）研究、といった具合だ。

ところで、私・下山は、大学を離れて退役生活に入るときに、所属主要学会（社会政策学会、経済理論学会）を辞めるなど、経済学者とは違った人生を歩もうとして、上手くゆかず、結局似たような生活を加齢相応の低レベルで行ってきている。

が、先代・本間さんは見事に芸術家への華麗な転身を為された。二度の人生を生きるわけで、



右が本間さん（左がご本人）

うらやましい。たしか、忌野清四郎が亡くなった2009年、本間さんが開かれた版画の個展を、新谷さんご夫婦に連れだって観覧し、「おみごと！」との印象を頂いた。そしてこのたび「大学教師の職を退いてからほぼ20年の間、老後の趣味として木版画の制作を楽しんできましたが、4年ほど前から油絵をはじめました・・・」との案内状を頂き、国立・コートギャラリーで開かれた本間さんの油絵個展を、5月13日に観覧、同じ印象を重ねたのである。

南武線・谷保駅～中央線・国立駅間の見事な新緑深緑の桜並木2キロ弱を、往復した。往路は谷保天満宮の臥牛像、一ツ橋大兼松講堂の怪獣などをブラブラ見ながらである。会場の画廊には、私の様な旧同業の友人、信州大・横国大の教え子、画家としての本間さんの友人らしき人たちが、切れ目なしに訪れている感じだった。絵は地球上各地の風景画で、日本は自然そのもの、外国は建物を描くのが主といった感じだ。私がいちばん気に入ったのは、黒の色調を捨象すれば、渋谷的雰囲気のパールランド・ワルシャワ題材「黒い映画館」。その絵の前に、今回個展案内状に「もうすぐ卒寿」と書かれた本間さん、そしてあと数日で傘寿となる私が連れだって撮った写真を紹介します。

（注）本文中のカッコ内の年代について、確認でき次第、更新します。（編集子）